

教室配属について

教室配属について

1998年度教科課程委員 河野正司

豊かな人間性と能力を持った歯科医師を社会に輩出できるようにと、学部のカリキュラムは毎年のように改良が加えられています。その1つとして、昨年度から5年生に対して始まった「教室配属」があります。基礎および臨床教科の講義が終了し、臨床実習が開始されるこの時点で、これまで履修した各教科とこれから始まる臨床実習との接点を具体的に体験できる機会として、この「教室配属」が行われています。4月から夏休みまでの期間、基礎系あるいは臨床系のいずれかの講座に所属して、研究生生活を体験するというカリキュラムです。この実習を通して、歯科医学の研究活動の一側面に触れることも、あるいは専門知識の必要とされる治療の現場に立ち会うことも可能でしょう。歯学における研究の意義と重要性を認識して、ライフサイエンスとしての歯学の理解を深めて、これから始まる臨床実習の動機付けとすることを目的としています。同時に、教室の研究者とのふれあいを通じて、彼らの研究態度や人生観に触れることは、学生諸君にとって、講義や実習では得られない貴重な体験となるでしょう。配属方法は、各講座の実習内容を公表し、学生の希望に基づいて各講座に均等に配属するようにしています。

各グループは、毎週水曜日の午後にそれぞれが選択した各講座を訪れ、昨年度は教室別に設定された下記のようなテーマについての実習、演習を行いました。

- ・ 講座で計画された実験
- ・ 講座で進行中の研究の見学や補助
- ・ 講座の研究に関連する論文の抄録や輪読

この実習や演習においては、すべての可能性は

諸君らの積極性に秘められているといっているでしょう。

保存学第一教室配属

小松康高

来年の総合診療実習を目前にしたこの時期に「教室配属」という新たな機会を与えていただいた。臨床の現場の雰囲気を感じることができ、意欲の向上も図れた貴重な経験となった。

第一保存科の「う蝕のリスクファクター」について実習、演習を行った。講義を通じて、歯の切削を極力控えた保存的で診断を重視した治療に感銘を受けたのが選択の大きな動機であった。内容は最初に学生相互に、その後に保存科に通院されている患者さんを対象にう蝕のリスクの程度を調べ、個人に応じた予防プログラムを作製した。唾液緩衝能やS. mutans数など予想以上に口腔内環境に個人差がある事に驚き、個人に応じた治療の必要性を痛感した。またこの時学生以外の口腔内を初めて見たのだが、探針、ミラーの操作、患者への問いかけ方など、どれをとってもぎこちなく、頻繁に傍にいた先生に救いをもとめるかの様に疑問点を即座に尋ねていた光景が患者に耐え難い程の不安を与えていたと思う。患者一人一人が違った顔を持っていて、マネキン実習とは大きく様相が違う事を強く感じた。

そもそも臨床とは理想体系や画一性からの逸脱を根本原理に置くものだったと思う。それ故、患者個人の状態を理解し対処していく事が本筋であり、教科書的知識、マニュアル化された治療自体、無意味なものに思える。しかし患者取り違えなど初歩的医療ミスが取沙汰されていて、世間全体がマニュアル化文明の一部品になっている感がある。集団の調和、画一性こそ美德だということのか。

一方インフォームドコンセントの概念が広く浸透し、患者主体の医療が求められているが、リスクに応じた保存的治療は社会趨勢に順行したものだと思う。相互意思疎通が図れ、信頼関係も増し、何よりもこれまで以上に誠心誠意を以って患者に接する良い機会になると思う。

矯正学教室配属

伊 藤 真 英

僕は詳細不明の抽選から歯科矯正学講座にお世話になることになりました。この教室配属実習カリキュラムが1年目ということで、先輩からの情報もなく、前もって私たちに配られた資料にも詳しいことはなにも載っていませんでした。そういういきさつからいったい何をするのかよく分からないまま最初の時間を迎えました。そんな僕たちの担当は星先生でした。先生の話では他の講座のようにあらかじめテーマが用意してあるのではなく、結局テーマは自分たちで考えよということでした。

同じ班としてメンバーになったのが2人とも矯正治療経験者ということもあり、かなりディープなテーマになりそうでしたが、与えられた時間があまり無いことと、研究テーマに沿った発表の経験のなさから決めました。「叢生治療を行ってまだその後に歯列の不正が生じてしまうこと」を気になることとして挙がっていたので、実際の経過を調べることになりました。研究方法としては実際の患者さんのデータをお借りして叢生治療を行った患者さんをデータベースからピックアップして石膏模型から歯冠幅径総和を計測し、ディスクレパンシーを求めました。得られた数値を集計し、統計しました。当初考えていたよりも地道な作業の連続で時には集中力が欠けてしまい、窓の外に広がる青い空に誘われることもありました。今までほとんど経験したことのない計測は数をこなすうちに効率的にできるようになり、外来の内側にある技工室では先生方と講義とは違う臨臨床的な話をすることができました。こういう時間は今まで

になかったものなので新鮮で面白かったです。

全部で8回という超短縮型の研究？でしたが、僕たちとしては1つのレポートにまとめることができた内容に満足しています。「レポートの内容についてはあまり意味ないジャン」と星先生に評価をいただきましたが。4年生までに他の講座でも班単位でテーマを決めてみんなで考えたことを発表する機会は何度もありましたが、今回は3人という最少数での作業と自分たちでテーマを決め、どのようにして発表にまでたどり着けるか道筋を考えて研究することは大変でした。逆に一人一人でもつ責任は大きなものとなり中途半端なものでは形にすらないという危機感を楽しむことができたのでいい経験ができたと思いました。

口腔解剖学第二教室配属

相 田 恵

4月から6月まで8週にわたり、私達は「教室配属」という比較的自由に学べる時間を与えられた。しかし、まず講座を選択したのが4年次であったことと、参考となるのが全講座の簡単な説明の書かれたプリント1枚であったことで、いまひとつ「これだ」と感じる事が出来なかったのも事実である。基礎系、臨床系の講座の中から私は口腔解剖学第二講座で学ばせてもらえることになった。実を言うと第一希望ではない。しかし、実際に講座に行き、説明を聞き、一通りの流れの書かれた資料に目を通すうちに興味を持った。今思えば、今回ここで学ばなかったら、一生とまではいかないだろうが関わることの無い世界となっていたかも知れない。また、例えば今後何かの機会に電顕の為の試料を作製したりすることがあるとしたならば、今回の体験は貴重なものとなるだろう。試料の固定から薄切、染色、色々な顕微鏡を使っの観察、写真撮影、スライドの作製等内容は盛り沢山で、毎日忙しかったが充実していたと思う。担当の先生も毎週丁寧に分かりやすく指導して下さったので感謝している。

今後この教室配属を行うのであれば、まず配属

先の選択をもう少し余裕をもって考えられるようにして欲しい。それから、1講座のみでなく、いくつか他にも選択することが出来れば良かったと思う。ただし、今回の様に8週という枠の中では時間的にそれは無理であろう。他の講座で学んだ人により評価は様々であるが、私は有意義かつ心に残る時間を過ごせたと思う。

口腔生理学教室配属

小 林 慶 子

私たち5年生は、歯学部初の試みとして臨床、基礎の各講座へ週1回勉強しに行くことになりました。

教室配属初日、私たちに与えられたテーマは、動物が生きていくために必要不可欠な行為である食べ物を味わって食べることの仕組みを生理学的な見地から考えてみようということでした。初日は、ラットを使った嚥下の誘発実験を観察しました。咽頭領域を神経支配している舌咽神経咽頭枝と喉頭領域を神経支配している上喉頭神経を電気刺激して嚥下を誘発させる実験です。両神経からさらに細く枝分かれして咽頭、喉頭領域の受容器

まで伸びている神経線維が、受容器が受けた機械刺激や化学刺激の情報を、確実に嚥下中枢に伝え、嚥下を引き起こすという生態の仕組みの見事さを、実際に目にすることができました。また、顎運動測定分析システムを使い私の顎の動きを3次元的に解析するという実験を行いました。上顎を基準として、下顎にフェイスボウをつけて切歯点の動きをカメラでとらえ、前頭、矢状、水平面に投影するというもので、私は自分の顎運動を画面にまのあたりにして顎を動かすときの癖など新しい発見も多く、貴重な体験をすることができました。食べ物を飲み込む前には味を味わうということで味覚についても勉強しました。興味深かったのはこく味についてです。こく味とは一体どういう味なのだろうか、甘、塩、酸、苦といった4基本味とどう違うのか、舌や咽頭、喉頭のどの部分で感受性が高いかなどを、こく味調味料を使って実験しました。

私は今回の口腔生理学講座の教室配属によって、今まで当たり前に行っていた、物を食べ、味わうということの奥の深さ、おもしろさを知り、体験することができました。